

野國總管 甘藷伝来400年祭に出席して

(社)農林水産技術情報協会研究顧問 坂井 健吉

まえがき

さつまいもでは青木昆陽を知る人は多いが、野國總管を知る人は少ない。しかし、わが国に初めてさつまいもを導入し、普及した人は野國總管であり、当時の沖縄は琉球王朝時代であったが、その功績は偉大である。今回、沖縄県嘉手納町で行われた、野國總管甘藷伝来400年祭に出席したのを機に、野國總管とその業績、400年祭の概要を紹介する。なお、以下さつまいもを甘藷とし、野國總管の國と總を旧字体としたのは地元表現を用いたためである。

1. 野國總管について

野國總管については、拙著「さつまいも」(ものと人間の文化史90、1999、法政大学出版局)に紹介したが、今回はそれ以上の情報が得られるのではないかと期待して出席した。その結果、若干の史料が得られたので、それを基にあらためて野國總管について紹介する。

野國總管の生没年は不詳であり、その名前も史料の記述から拾った呼称で、姓は出身地の野國村(現嘉手納町)を指し、名は琉球王国の役職を示している。当時、琉球から明に朝貢する「進貢船」使節の事務長の名を總管

と呼んだので、野國村から出た總管ということで、野國總管と呼んだようである。得られた関係史料は8編と附の2編であるが、8編の中の6編は野國總管が中国福建省(當時は閩州^{びん}と称した)から持ち帰った芋の普及に貢献した、垣花儀間村の地頭であった儀間真常の家譜(「麻氏家譜」六世真常の1605年の記録)に記述されている内容と、ほぼ同様のものとなっている。すなわち、野國總管が持ち帰った芋を真常が沖縄各地に広めたとの記事で、總管の功績及び真常の功績を記した



嘉手納町の“道の駅”前に建立された野國總管の座像(中国福建省の方を向いている)

ものである。これが1番目で、ついで琉球国由来記（1713）がある。内容的には麻氏家譜と同様であるが、甘藷には数種類があることと、黄色種のことを記されている。3番目の「琉球国旧記」（1713）は前記「家譜」、「由来記」とほぼ同様である。4番目の「球陽」（1745）は「琉球国旧記」をうけてのもので、内容もまたほぼ同じであるが、球陽に収録されたことは、芋の導入が沖縄にとって極めて重要なできごとであり、敢えていえば野國が国に功あるものとの評価の表明となったことを述べている。次いで5番目に「野國總管由来記」がある。この由来記は野國の墓前に建てられた碑文で、野國の子孫（六世孫）が建てたものであり、前記の真常家譜と旧記を引用し、地頭の野國正恒が1700年に野國の功を称して墓を移して新築したことを記している。これらを受けて史料の6、7、8番目は1764年に有名となった總管の子孫の家譜認知と、家譜編集の許可に関する、評定所のせんぎ僉議や覚え書等が出てくるが、芋の導入と普及には直接的には関係はない。

附の2編は總管の話ではないが、總管以降にもたらされた別種の芋の話である。その1つは前記「麻氏家譜」の九世儀間親雲上真周に記述されているもので、1691年に中国に渡った小禄間切儀間村の住人、船越筑登之が持ち帰った芋のことである。この芋は成長するにしたがって蔓が広く繁茂したので、地味の痩せている沖縄にはよいということから、国中に多く植え付けるようになり、記録に載せるようにしたとのことである。“今唐芋”といっているのはこの芋である。もう1編は霜雪に耐える芋のことで、八重山の住人が台風に逢って福建の内下間に漂着したのを



新装なった野國神社

迎えにいった新城筑登之と富名越筑登之の兩人が持ち帰った、この黄色の芋は霜雪によく耐える品種で、多くの人々の利益となり普及したと記載されている。

以上を総括すると、總管と芋の話は、まず、①儀間真常の家譜に記載された、總管の持ち帰った芋を沖縄の各地に広めたとの記事が最初で、總管と真常の功績を記すものである。②の「琉球国由来記」は内容的には①とほぼ同様であるが、芋には数種あることと、黄色種のことを記されている。③は①②とほぼ同様であり、④の「球陽」は③を受けてのもので、内容もほぼ同様であるが、芋の導入は琉球国にとって極めて重要なできごとであり、野國總管の功績は真に大きいと記されている。⑤⑥⑦⑧は總管の墓前に建てられた碑文とその子孫の土籍認知のことで、總管の功績とは直接的には関係はない。また附の2編は、總管の話ではないが、總管以降にもたらされた別種の芋の話である。

こうしてみると、野國總管と芋との関係は儀間真常の家譜や旧記、球陽などで記録され、功績が認知されたものの、それ以外は子孫の話しへと続くが、肝心の總管自身については、いつ生まれていつ亡くなったのか、中国に渡

ったいきさつ、總管の職種の由来、何ゆえに總管になったのかなどなど、不明な点が多く、これから解明するにも関連の史料が乏しく、困難視されている。しかし芋がアメリカ大陸からフィリピンを経て16世紀中程に中国に入り、数十年を経ずして野國によって琉球にもたらされ、やがて18世紀には日本各地に広がっていたことを考えると、世界的規模の芋の伝播という歴史的なできごとの一環に、野國總管がいたということは確実で、その功績は真に偉大であったといえる。

2. 野國總管甘藷伝来400年祭について

(1) 開催の趣意

今年（2005年）は野國總管が中国から甘藷をわが国に導入して、400年にあたる記念すべき年であり、350年祭に続く祭典として、總管の生誕地、嘉手納町において平成17年9月30日から3日間にわたり、盛大に開催された。その趣意の一つは、甘藷の重要性を喚起することにある。すなわち、本土でも同様であるが、飽食の時代を迎えて食料としての甘藷の重要性が低下し、果てはここ沖縄でも甘藷の導入や品種改良、栽培法に貢献した人々の存在すら忘れられようとしている昨今の状況に鑑み、導入以来の古より多くの人々を飢餓から救ってきた、甘藷は極めて重要な作物であることを喚起することにある。いま一つは沖縄県産甘藷のさらなる発展を図ろうとすることにある。すなわち、県として甘藷を第2次沖縄県農林水産業振興計画の中の戦略品目として位置づけ、観光産業とも連携して、優良品種の育成や普及、各種対策を実施することにある。このような趣意に基づき、今回嘉手納町において「野國總管甘藷伝来

400年祭」を举行し、先達の遺徳を称えるとともに、甘藷の重要性を広く全国に発信したいとのことである。

2) 祭典の概要

(1) 主催者の挨拶

祭典の主催は、沖縄県嘉手納町に設けられた「野國總管甘藷伝来400年祭実行委員会」で、実行委員長には嘉手納町長の宮城篤実氏、名誉実行委員長には沖縄県知事の稲嶺恵一氏が当たられた。両委員長の挨拶が祭典の目的を表している、その概要を紹介する。

宮城篤実町長：今年、2005年は私たちの先達、野國總管が中国から甘藷をわが国にもたらして400年の記念すべき節目の年である。嘉手納町においては、この慶賀を記念し、野國總管を称え、甘藷を「野國いも」の愛称で呼ぶとともに、野國總管の偉業の継承発展と未来を希求する食品としての甘藷の発展を目的に「野國總管甘藷伝来400年祭」を町民の協働により举行する。

400年祭に向けては、7年前の泡盛寄贈事業を皮切りに、甘藷伝播調査や野國總管宮の補修など各種事業を実施するとともに、2005年を「野國總管甘藷伝来400年祭」として位置付け、昨年末のカウントダウンを初めとして、今日この日に向け、各種事業を推進してきた。いよいよ本番である。9月30日(金)から10月2日(日)にかけて、記念式典、野國總管甘藷展示会、全国甘藷物産市、大焼き芋大会、道ジュネー、大花火大会、と楽しいイベントが計画されている。祭りを存分にお楽しみ下さい。そして、この祭典を次ぎの甘藷伝来450年祭に引き継いでくれることを望みたい。



記念式典

稲嶺恵一知事：今年は、嘉手納町が生んだ偉人「野國總管」が甘藷を導入して400目にあたる記念すべき年である。1605年進貢船で中国に渡った野國總管が甘藷を琉球に伝え、その栽培方法が確立、普及されると、琉球のみならず日本全国へも広く伝わり、食料事情の改善に大きく貢献することになった。また、戦中戦後の食料難の時代においても、甘藷は多くの人々の飢えから救った重要な作物である。

近年、紅イモ等は加工品としての活用が広がるとともに、観光産業とも連携し、さらなる展開をみせていることから、県としては甘藷を第2次沖縄県農林水産業振興計画の中で戦略品目として位置づけ、優良品種の育成や普及、各種対策の実施により振興を図っている。そのため、嘉手納町では「野國總管甘藷伝来400年祭」を挙行し、先達の遺徳を称えるとともに、甘藷の重要性を広く全国に発信する。

本祭典を契機に、沖縄県民はもとより、全国民が甘藷への認識を新たにするとともに、食材としてさらに親しんでくれることを願ってやまない。

(2) 各種のイベント

この祭典は50年前の350年祭に続くものと

して開催されたが、350年祭は占領下でもあったので、それほど目立った行事は行われなかったと思われる。それに引き替え今回は地元嘉手納町のみならず、県内関係者の物心両面にわたる絶大な協力により行われた。

各種のイベントには、甘藷と直接的に関係のないものもみられるが、全島あげての協力の賜物であり、この祭典にかける主催者の意気込みが感じられた。

主要イベントは9月30日から10月2日までの3日間であったが、プレイベントとして9月25日には、準全島クラスの強豪牛がぶつかりあう勇壮な記念闘牛大会が行われた。

イベントの主なものを紹介すると、次のとおりである。

9月30日：かでな文化センターにおいて、記念式典、野國總管例祭のあと嘉手納の未来を築く、かでなっこらによるエイサー、獅子舞、琉球舞踊など多彩な演目が嘉手納小中学校グラウンドで披露される。

10月1日：兼久海浜公園において、日本のトップの太鼓集団「鬼太鼓座」に總管太鼓など県内の太鼓団体による、勇壮な太鼓の演奏、生命の鼓動、太鼓フェスティバルが行われる。

10月2日：1日目同様兼久海浜公園において、道ジュネーとして旗頭、チンクを先頭にした野國總管、儀間真常などの偉人行列に、華麗な花笠隊、嘉手納、北谷、読谷の勇壮な青年エイサー、伝統のエイサーなどの祝賀パレードが行われ、夜には400年祭のフィナーレとして、8,000発の花火で夜空を彩る。

また、9月30日から10月2日にかけての3日間、嘉手納小学校の体育館において、野國總管の業績や、おいもの伝播の歴史、生産、

加工、効能などをパネルや実物で展示する野國總管甘藷展示会や、グラウンドにおいて大焼き芋大会が行われる。

さらに、10月1日から2日にかけての2日間、兼久海浜公園において、全国甘藷物産市が開催される。この物産市は紅いも菓子から芋せんべい、干しいも、麺類、酒、ジュースなど、全国から甘藷とその加工品を取り揃えた多彩な物産市で、見て、食べて、販売も行われる。

最後に350年祭でも行われ、400年祭のこの日のために復活した、沖縄の伝統スポーツ角力大会として、子ども、職域、チャンピオン大会、南米も参加する「奉納全島角力大会」が行われる。

残念なことに9月30日の行事は滞りなく



甘藷発祥の地“野國いも宣言”の碑
(嘉手納町役場入口に建立されている)

行われたが、台風18号の接近により、夕方より雲行きがあやしくなり、10月1～2日の諸行事は10月15～16に延期となった。幸い台風は南にそれたので、明るく日は急きょ記念式典で表彰を受けた3人（後述）を囲む“いも談義”が開催された。

(3) 記念式典

記念式典は9月30日午後2時から約1時間半、“かでな文化センター”において挙行された。比嘉俊次氏の司会により、嘉手納町議会議長 伊礼政吉氏の開会のあいさつの後、嘉手納小学校30名、屋良小学校30名の児童らによる“イメージソング”の合唱が行われ、会場の雰囲気は弥が上にも盛り上がった。続いて前述の町長、知事の挨拶があり、祝辞が中国福建省人民政府農村工作弁公室副処長 許惠霖氏、農林水産省生産局長 西川孝一氏（代読による）、埼玉県川越市長 舟橋功一氏の3方から述べられた。中国福建省は野國總管が芋を入手した原産地であり、川越市は芋を通じて嘉手納町の友好都市である。

次いで筆者もその1人であるが、野國總管甘藷功労賞が次の3人に授与された。

- 湯之上 忠氏 鹿児島県指宿市 1918年（大正7年）3月生 甘藷の品種改良およびさつまいも文献資料室の開設
- 坂井 健吉氏 茨城県取手市 1924年（大正13年）8月生 甘藷の新しい育種法の開発
- 井上 浩氏 埼玉県川越市 1931年（昭和6年）4月生 甘藷に関する啓蒙、啓発活動

受賞者の代表挨拶があり、続いて記念式のフィナーレを飾る“野國いも宣言”が嘉手納

中学校生徒の比嘉琴美さんにより、高々と朗読され、嘉手納商工会長 宮里辰秀氏の閉会のあいさつで無事式典が終了した。因みに野國いも宣言を掲げると次のとおりである。

○ 野國いも宣言

1605年、我が街の先達・野國總管によって中国福建省からもたらされた甘藷は、野國總管生誕の地、野國を発信基地として琉球の全ての村々へ、そして、薩摩を経て全国へと広まり、人々を餓えや飢饉から救い、全国民が等しくその恩恵に浴することになりました。今日、甘藷は未来を希求する健康食品として注目を浴びております。甘藷伝来400年の節目を迎える2005年、野國總管の偉業を奉祝する「野國總管甘藷伝来400年祭」が全町民の手により挙行されました。この慶賀を機に、わが国における甘藷発祥の地・嘉手納を全国に広く発信するとともに、野國總管を称え、甘藷を「野國いも」の愛称で呼ぶことを高々と宣言します。

あとがき

受賞者を代表して話したお礼の言葉の概要を記してあとがきとする。

今回、はからずも沖縄県嘉手納町で行われた「野國總管甘藷伝来400年祭」に招かれ、受賞の榮に浴したことを大変光榮に思っている。言うまでもなく、古より甘藷に対する重要性の認識は、沖縄県の人々は他の都道府県の人々より高いと思われるが、それにもかかわらず、このような意義のある式典を挙行し、失われゆく甘藷の重要性を喚起するとともに、さらなる発展を期することに衷心より敬意を表したい。

過去、幾度かの食糧飢饉に際し、人命を救

ってきた甘藷の功德は今更いうまでもない。昨今、飽食に甘んじて、その恩恵を忘れることへの警告は常に心得べきことと考える。そのためにもこれからの甘藷の発展方向を確立しておく必要がある。

甘藷のさらなる発展のためには、バイオテクノロジーなど近代科学のノウハウを駆使した新品種や新規用途の開発の必要なことは言うまでもない。しかし、それとともに太陽エネルギーを固定する能力が、わが国の作物の中でもっとも高いという特性を活用した、革新的な技術開発が望まれる。高いエネルギー固定能力を活用した食用品種の開発、石油資源に代替しうるバイオマス資源への活用、環境保全型農業への積極的な組み入れ技術の確立など、国内のみならず、国際的観点からも注目される技術開発が必要である。

編集後記 西の山々に、いまかくれようとして
いる夕陽に映えて、池のほとりのサクラ
がひととき美しく茜色に染まり、元
気に動いてさえずり合っていた可憐な小鳥たちも、
ねぐらへと向かいはじめ、長い春の一日も終ろ
うとしています。そよ風に吹かれた花びらが水
面を彩り、傍の草陰からはカエルの歌が低くひ
びいてきました。空は一面の夕焼け、明日も晴
れて生きものたちもまた喜びにあふれて舞い、
そして歌で楽しませてくれるでしょう。

いも類振興情報 第87号

平成18年4月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41
ヴィップ赤坂303号室
電話 03-3588-1040
FAX 03-3588-1225
振替 00130-1-110152
印刷所 JTB印刷株式会社